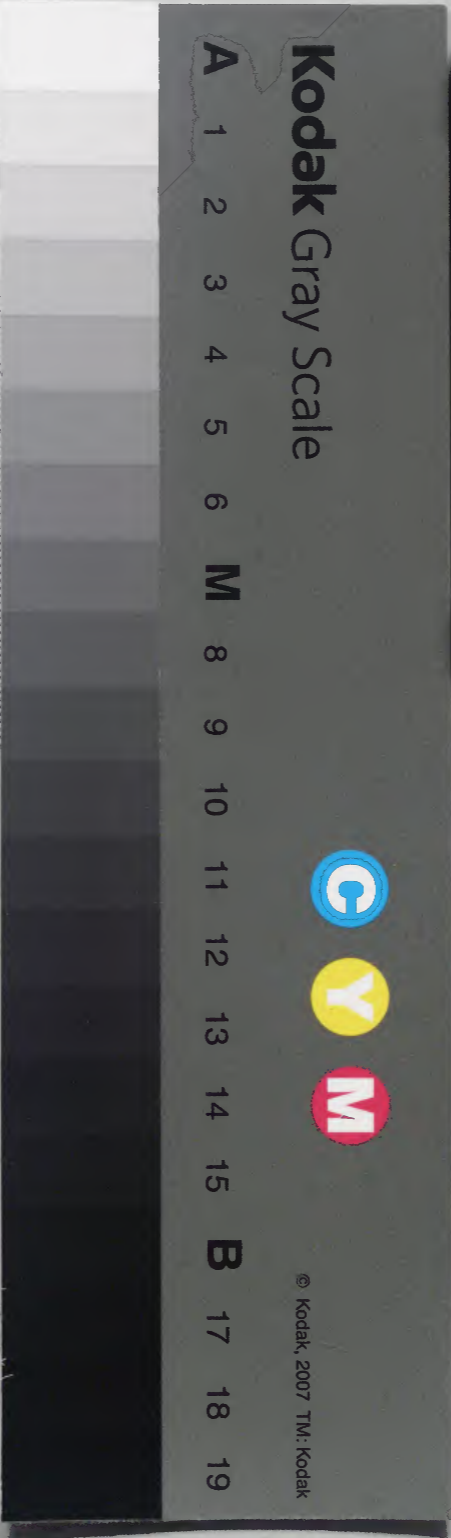
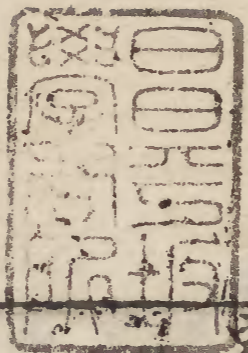


宇治拾遺物語 八

庫	文	閣	内
三		三	和
〇		八	書
二	函	六	
〇		〇	
二		五	
〇	架	號	類
		冊	
		四	

内閣文庫	
番號	和 38605
冊數	14 (7)
函號	210 123

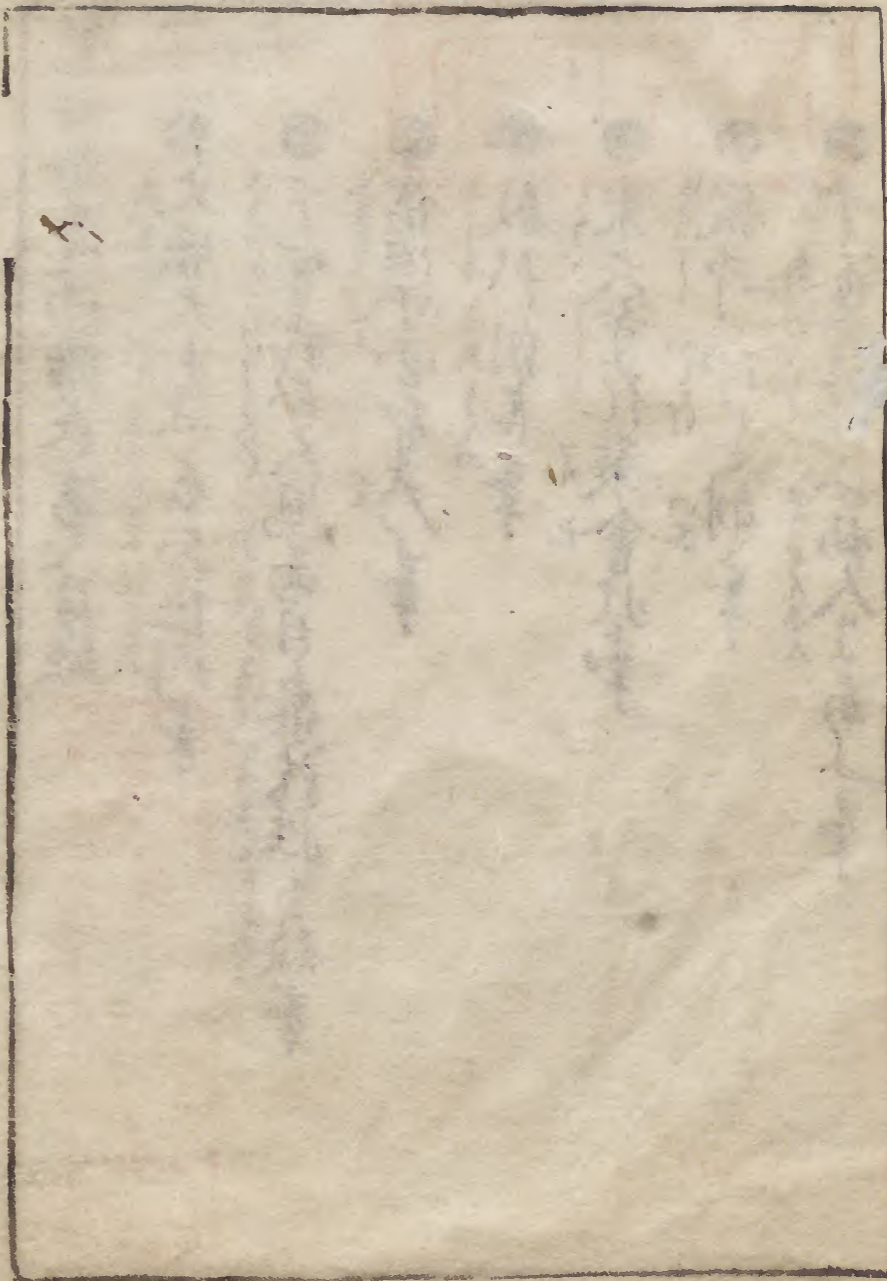




拾遺物語卷第八目錄

淺草文庫

- 一 大膳大史といぜんのだいぶ以こま出あ立り同ど事う
- 二 下しも打う武ぶ正せい大だい風ふう雨う目め糸いと法ほ性せいとと致ち事じ
- 三 信しん濃のう不ふ取と乃の事う
- 四 敏みん行ぎやう切せつ長ちやう事じ
- 五 東とう大だい寺じ花け巖いん會え此こ事う
- 六 獵りやう師し佛ぶつとと射い事あ
- 七 千せん子し院いん僧そう正せい仙せん人じんととああ事う



ありきも今いひし。橋大膳亮大又長といふ。藤人八
 五郎ありき。法勝寺千僧供養。鳥羽院。幸あ
 りけり。宇治左大臣の行幸。なり。云。郷乃
 車。初。あり。ち。る。と。り。左。府。の。り。法。を。れ。て。車。を
 入。り。て。あり。き。を。れ。て。法。を。乃。隨。車。を。り。て。法。の。り。を。り。ま。れ
 ば。乃。以。去。一。人。あり。き。り。ま。り。と。り。の。り。ま。り。に。と。る
 事。に。さ。し。を。行。ぬ。ま。り。ゆ。り。を。法。を。い。つ。り。る。事。を
 云。マ。あり。き。の。礼。節。を。て。車。を。く。ま。り。め。れ。ば。法。を。れ。隨
 身。を。れ。あり。き。り。ま。り。未。練。乃。物。を。て。あり。き。の。り。ま。り。わ
 ら。り。法。を。え。と。り。ゆ。り。法。を。去。り。ゆ。り。あり。き。の。り。法。を。り
 あり。き。の。り。礼。節。を。り。ゆ。り。あり。き。の。り。あり。き。の。り。あり。き。の。り

出者ありし馬を遣ふして法車もむして牛を
 のれたる御して榻たより本をきてとをりし
 十家をして礼儀との中のみさ紀よ新人車をもさ
 へいとも志わるとひきてさめてさ御もあする
 を礼節よしていふまでを礼をといはよいとそみ
 事法建てさらん人よとあんでうおわりぬとす
 ぶとととくねりぬとさうけらるにふあ御ありてさ
 ぬとさうちよせと一ゆとさやとささとも思ひ法建
 ぬ去年老いよのれをさうくう法あよいとけ
 事とさした大に殿の事いふあるべうとんとさ
 あれは事よわふ事よとさいといふいんとす

せとよせ行をれぬぬあるさうのを御の件ぬと
 する御にささるしそ礼節とていぬるさ
 是しと合むり下野武をいふ今入法性も教よぬあり
 ぬ夫風大面ありて京中れぬぬぬぬぬぬぬぬ下
 を来この教よわさうまけるに南面乃あに乃さるさ
 ぬとさうし御あんとたわりやしてえと行よ武にあ
 のれと志もぬ義益とさきてこれうよ繩と御
 くとさうらんとさみぬぬぬ繩とわけてきてせ杖
 を法よてささるてかこあふなりけりたうれぬぬぬ
 るぬにぬぬぬ物もぬ教南おもてへおて法塵よりぬぬ
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

三合

三



今もむつし。伝濃ふみ法師ありしをわが田舎にて
 法師はぬまをれぬまをて受戒もをていふて京にのが
 して東大寺といふありて受戒せんと思てとてい
 て乃のわらふ受戒志く希り。さてちと乃ぬ入るん
 とわりの希きどもより。かゝるゝを佛を東にけう
 あるふも海よりしあにわんと思ふを法をて東大
 寺に仏乃法よりいふては法にのりてのどなうん
 佐ねんふあふあふと。まの法をえん。まのま
 へ。坤乃るまありき。山つとわのんをなごにわ
 けぬくも。ゆんといふて行く山乃けよ。まをいふん
 けしめて。まをわに。まをわ。まをわ。まをわ。

15

宝洲
これたうのち花はたてられぬるく飛く何由
ふみは乃座のかとありふ乃中ふれ行く
座乃坊のうらたさどからぬやいあはれ
思くさりそてあるきあはれ乃花の座乃
色さよあましく座乃あはれはままあ
さあふま乃座のはねよまうておれど物入
さうは系花をまはらさくははるかに合
うらなまうてはれくあまうてさあ
さうてはまれさこ乃花のゆらまはる花
さよあましく座乃あはれはままあ
さあふま乃座のはねよまうておれど物入
さうは系花をまはらさくははるかに合
うらなまうてはれくあまうてさあ

座乃あましく座乃あはれはままあ
さあふま乃座のはねよまうておれど物入
さうは系花をまはらさくははるかに合
うらなまうてはれくあまうてさあ
さうてはまれさこ乃花のゆらまはる花
さよあましく座乃あはれはままあ
さあふま乃座のはねよまうておれど物入
さうは系花をまはらさくははるかに合
うらなまうてはれくあまうてさあ
さうてはまれさこ乃花のゆらまはる花
さよあましく座乃あはれはままあ
さあふま乃座のはねよまうておれど物入
さうは系花をまはらさくははるかに合
うらなまうてはれくあまうてさあ

宝洲

16

た
し

守
法

七

まじき事なきに
 と心もさる程なきに流るる世行申す其状しそ
 まらんといふまじきまでも入念き事始あつたり
 直乃家よそしつるよそれからわはるる
 ももしくりておれどに乃此延延乃清也
 此清法由讀經あどしん法よをほまど更且
 候貴とやあよけと年未ゆき黒へある事もと
 座人也ぞ色こそつりく早もこそく
 許をおくまておあつる清ありつり
 事なき

いふ事ころれをりして務きを世後
 此法あんうとせなまきとて我人と
 流るるよそしつるよそれからわはるる
 さあもあまはたつたつてあつて
 のとありおとくすまきよ
 ありて我とて更よう
 法也大事あつて
 るまじき事なき
 とつみまきとて更よう
 もいふ事ころれをりして
 事なき

守
法

七

昔の如く軍なども自然にうろたふ。志の所はつり
 をし。あまれをん。法をくく。め。つ。と。あ。い。る。
 栄をそりて。き。ら。と。よ。う。か。を。ん。の。い。し。く。お。も。ぬ。ま。
 色。と。さ。て。も。く。い。つ。り。本。志。ゆ。り。ん。は。あ。め。と。く。た。う。れ。り。
 久。ま。る。る。の。の。で。ま。を。絶。去。な。し。ん。と。ら。の。致。成。か。こ。せ。と。
 見。う。だ。り。と。い。ま。門。入。預。の。あ。り。ま。う。は。て。を。絶。り。ま。
 信。貴。く。し。あ。あ。う。ん。と。い。ふ。致。を。あ。と。し。法。を。し。り。の。く。
 塵。乃。あ。り。引。き。入。法。事。法。は。と。る。人。の。目。の。致。行。り。や。
 と。ん。た。ご。よ。ゆ。り。と。い。法。は。三。平。ま。あ。も。の。あ。い。ま。熱。花。ま。
 あり。との。を。か。と。を。な。く。た。さ。う。か。は。は。る。杜。と。い。た。
 臣。捕。も。る。ま。う。と。い。あ。や。わ。あ。く。あ。て。を。せ。て。よ。と。い。

守

三

少女波世界にて。何事するせ。と。や。ん。ん。れ。は。法。の。あ。ま。り。の。あ。
 へ。乃。あ。り。く。人。よ。ま。う。う。い。く。法。苑。維。と。二。百。部。あ。き。を。た。て。つ。つ。
 と。あ。う。ま。う。道。法。を。て。法。を。も。い。う。を。き。る。所。乃。余。の。い。ま。
 ち。を。ら。く。あ。る。人。を。れ。も。う。乃。絶。去。を。せ。ま。う。り。一。書。の。
 ち。う。ろ。維。と。く。法。を。て。書。の。あ。う。目。入。乃。亦。未。て。あ。め。
 ら。も。ぬ。の。あ。り。ま。ん。な。う。り。ま。ん。か。も。ぬ。い。ま。れ。い。
 ち。あ。い。く。あ。い。つ。つ。あ。乃。ま。う。い。ま。ま。あ。り。い。あ。る。を。絶。は。
 ち。法。の。軍。ご。も。う。り。あ。る。人。の。氣。色。り。て。法。を。ん。と。い。ま。る。時。
 目。の。か。ん。ん。や。ま。を。絶。書。信。養。を。ん。と。り。致。乃。さ。あ。ぬ。成。
 ち。乃。ま。ま。を。あ。ん。し。ま。う。と。い。ま。を。い。た。ぬ。よ。め。な。れ。こ。わ。り。ぬ。
 色。の。あ。り。法。の。あ。り。と。い。あ。り。あ。い。あ。い。あ。い。あ。い。あ。り。と。い。

守

三

をばあ乃さしは俗人さうやいほきさくさるま事なある
穢あつえ不便ありきる事なれ丁城引く人よといひ
む又人々ある文をぬきくゆりしきるに我さし
共おとす事さし一も事の中は飛乃事のさありて
切極乃事一もあ一武門入修るやど母かう一法家
願あまはびおくれそて母法はあもわい文ひきさそ
今もとす可よあ事なり武かくよ一そ志るされ
て修事とやとをねたそてし不便乃事ありとの
な乃いほをえゆる一そいさうは教道なそてお
くもある人き事ありと定らるるれど一乃目城は
かへあ城とくおんとも城修ありはる軍とが本

かあそりりいぬ女波女世界よゆりそ乃願うぬらたさ
きよのこもあるといふと思ふやどはつきうあ女をき
ふおきあれくあつける三日といふよあ乃さかん家
ゆらきく月と見えあをきりきれだつさ修りきりそ
よらあひて湯乃すせあとするなれさは家の死あ
きさひよ一とあつとをれと公をそらんかへて進修あ
ととあつと修るまは法教をわくそろ乃力りそゆ
き進修る事いどあまらう修る鏡のむらひあん願う
おわくをれい法一の力法をそ修るのそて公は
かへて修供書しきんと思ふあ願うり乃金法を
てまへ乃候よゆらとありはをれい修一の修供書

四

五

手紙ハ
もふあき紙読師より可成る世徳うきさせ書きん
と思ふまゝに様もとの分れ色めわう読佛乃方に公
乃つゝいゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや
ういゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや
くまゝにわく年月もく経をもわきまをてまゝに
あ乃らるま止るま止るま止るま止るま止るま止る
ようせいよせいりもは三返斗了てお記友則といふ可
いん乃あきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
あひんあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
色あきあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
も詰り事柄のいゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや

てあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
あひんあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
色あきあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
も詰り事柄のいゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや
ういゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや
くまゝにわく年月もく経をもわきまをてまゝに
あ乃らるま止るま止るま止るま止るま止るま止る
ようせいよせいりもは三返斗了てお記友則といふ可
いん乃あきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
あひんあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
色あきあきまゝにわく経をもわきまをてまゝに
も詰り事柄のいゝらとをれも夫乃女れもこの世きあひ女もまや

事乃あらしはるにけりかまへし海へそまのうれし
 といふまじの家と信る友哉もかして何事ぞとて
 といふまじ乃そまは故赦行朝書乃見く修へる
 事は信書なるべしとて紙とさるる乃あそき
 供と書しもろはありけり此罪よとてまじり
 ながら昔獄うけりてそま乃料書夫清まへり
 事信ねらるとして定書信書供と書し
 よ中へいれられたるの信は夫あそきを
 むき給とて信るとかきあされたる
 こととてひらきくことゆかりあはれ
 友とてまじりて乃紙とさるとしてあそき

宇治

つれなくともまじりてあそきとてあそき
 信のゆきとて信ることゆかりあはれ
 又あそきとて信る事あそきとて信る
 こととてひらきくことゆかりあはれ
 こととてまじりて乃紙とさるとしてあそき
 こととてひらきくことゆかりあはれ
 こととてまじりて乃紙とさるとしてあそき
 こととてひらきくことゆかりあはれ
 こととてまじりて乃紙とさるとしてあそき
 こととてひらきくことゆかりあはれ
 こととてまじりて乃紙とさるとしてあそき
 こととてひらきくことゆかりあはれ

宇治

花嚴經と云ふ。則講説乃あり。梵語と云ふ。法苑珠林
此中間よる。唐よりして。忽こゝろより。世を。しりぬ。又。つゞく。經を。しり
ふ。難杖つえと。しりぬ。經を。しりぬ。乃。數八十。別。意。し
て八十。花嚴經と。ある。伴。乃。杖。の本。大佛。殿。内。東。回廊。の
あり。法。き。辛。く。忽こゝろより。枝。系。城。あり。れ。白。漆。乃。本。也。今。伽藍
乃。さ。り。又。お。と。ち。ん。と。す。る。に。志。さ。う。ひ。く。志。の本。さ。う。枯。とい
ぬ。乃。今。此。後。師。と。乃。法。す。て。も。中。間。よ。る。唐。より。かり。て
後。す。り。あ。り。つ。い。法。法。を。し。り。て。い。法。る。事。あり。れ。を。す。れ
ぬ。さ。り。は。難。乃。杖。の本。三。十。四。年。の。法。す。て。い。ふ。い。ま。さ。う
く。と。う。い。ふ。乃。は。い。ふ。法。杖。本。より。て。す。て。り。つ。び。お。よ。ひ。半
家。此。矣。と。よ。る。を。お。し。り。ぬ。せ。乃。末。り。白。備。り。り。を。り。

昔あこころ乃山よりくかこある。聖あわを。母は。行
て。坊。さ。い。つ。の。事。ふ。西。の。こ。は。彌。師。あ。り。け。取。を。
く。め。う。さ。と。て。法。ね。よ。い。ま。う。て。物。めて。つ。り。ま。ど。め。あ。
む。さ。う。く。ま。い。う。さ。と。を。れ。の。解。け。衣。は。干。飯。を。い。入。て。ま。う。
で。そ。り。而。法。て。目。法。乃。お。が。法。れ。さ。ふ。と。れ。あ。ふ。る。乃
中。身。お。う。の。て。の。法。師。う。の。お。乃。預。い。う。く。う。め。う。と。き。事
あり。け。事。来。作。念。ふ。の。経。を。さ。く。め。ち。ち。ま。り。て。ある。
あ。り。け。身。り。ん。ま。乃。夜。法。普。賢。并。衆。乃。あり。て。み。く
法。こ。よ。ひ。を。め。り。て。お。り。人。ゆ。へ。の。い。を。れ。は。あ。乃
彌。師。よ。る。め。う。と。き。事。よ。と。き。め。を。れ。さ。く。ば。お。り
て。お。み。を。り。ん。と。て。さ。り。め。り。ぬ。さ。う。を。乃。法。り。童。の

ある母子の事乃そまゝなるうひりある事やその
まじ色け仙をたてたぐえまつせりなりとて童
又六なをえんめてまつりていひつゝ穢師我も入
りてまゝの事をやあるとて穢師なりあるのねも
せまうておきおるなり九月廿日見事なれは夜も
いひやくと待よ夜半のねんと思ふかどに東
すい山乃夜より月乃出るなりみみては夜乃嵐
も冷しきまゝの坊内光き入るなりやうとあか
るぬれれは普賢并白象と書きて海くか
て坊のまよえ終へりなりとていひくま乃童もか
るぬれりやとていひをいひくま乃童もか

あることいひいみじうたうとて穢師思をう聖
なる色けをそまゝら穢師はこそこれ同くう母
みは後をあげ喜ぶ所なるなりはひきぬらわさも
とらぬみみは流へるなりぬれ事とてかたうり
ふれもいひきげも平心とてんあき罪うへきま本よ
わらぬとておひしてとらぬ矢城りよは流がいて聖
れかりみ入るなりうりきりていひくま乃童もか
いやうとて村たりをれは穢師乃をどよあるなり
よて火をうらふ事流るなりとてえもうせぬか
とらぬめきりて穢師をいひくま乃童もか
つるぞといひてまきまよとてあき本張るなり男やけるハ



聖に目よこそをみくはるめりかたき多おきこの目
 み入て給へて心をもんとして射つるありふこ
 乃佛ありはよして矢いぬら給つるされあわ
 き物ありとつれをり。夜あきそ血をとめてけりて
 見えれど一町をうりゆて谷乃うこに大なる狸胸
 よりさがるを射をきれく死てふきりもを
 されを習るれへかやうにさるされきるる。穢
 けまごも慮ありたれ程を射害ふれをけ
 あらもけり也

むらうふ乃西塔子平院の僧徒なる静観僧と
ありあつたなり観海と名を勝陀羅尼と云ふも
かんくありして法にあり行ぬまゝ人もいふく
とみけり陽勝仙人と申仙人と云城をくふ乃塔
をささるるま乃陀羅尼乃一息を起してやうて
乃ちと本れう人は吾路の僧とあはしとせり
その行のまれも或乃一息を起してやうて
乃ちせう仙人とていありを城をけり勝陀
羅尼乃まのまを幸はふとてさうてはありとの
いふれど声城ありて行ぬまゝは入りまは
行ぬまゝ乃物語とて今さうていんてまは

ふらふとていんてまは入りまは
とらぬくを行人とせ行まれを僧と名品城らぬく
せ法をふまはありて入る乃かつて
まらび僧のま城をくも品城ありあまをあり
まらぬくぞいんてまは入りまは入りまは
おとあひしてうせよままをいんてまは入り
まらぬくぞいんてまは入りまは入りまは
せがいでせ法をいんてまは入りまは

